

特論 4B

阪神間の邸宅街

住吉川扇状地の扇頂部にはまるでどこかの城の天守閣かといった風情の建築物があってひととき目を引いている。阪急御影駅^{みかげ}の北の丘に建つ甲南病院と同じ1934（昭和9）年に開館した白鶴美術館がそれで、日本や中国の仏教美術・工芸品、またベルシヤ絨毯の収集で知られるこの美術館のすぐそばに、白鶴酒造の創業者・嘉納家の邸宅が建っている。このあたりから下流、また西麓にかけては区画が広く、スパニッシュ・コロニアルあるいはスパニッシュ・ミッション様式などの凝った建築様式を持つ大邸宅が並んでいる。JR線の北側、左岸に建っていた久原邸などはその代表であり、図4B-1からもわかるように、圧倒的な敷地面積を誇っていた。久原邸は政友会系の衆議院議員を務めた久原財閥（その中核企業である久原鋳業は現在の日立製作所や日産自動車——要するに旧日産コンツェルン——の前身）の創始者房之助の邸宅である。水道路（現山手幹線）からJR東海道線にいたるその敷地の北部は1998年まで市立神戸商業高校となっていたが、現在は市営住宅や企業の社宅、南半分が大型集合住宅（いわゆる億ション）群となつて中・高層のビルが建ち並んでおり、もとの豪邸の面影は、阪神間きつての長者たちが住まう南側の「高級」マンションの威容以外なくなった。久原邸の建設は1904（明治37）年で、住吉・御影の邸宅街のなかでは建築年代の古い部類に入る。また、1万坪を超えるその敷地の広さは住吉・御影の豪邸街のなかでも群を抜いていた。

これらの邸宅が立地しはじめたのは、第4章でも指摘されたように私鉄や土地会社による阪神間の郊外住宅地開発がはじまる時期に先行している。箕面有馬電軌による池田室町住宅の開発は1910（明治43）年であるが、その約10年前の1900（明治33）年頃からにわかに関西財界人が次々と邸宅を構えはじめたのである。朝日新聞の創設者村山龍平が御影郡家の弓鶴羽神社横に数千坪という広大な土地を買い居を構えたのが嚆矢とされる。もっとも、その背景に、1874（明治7）年の官営鉄道東海道線大阪-神戸間の開通があることを忘れてはなるまい。大阪-神戸間の駅は、神崎、西宮、住吉、三宮の四つしかなく、神戸東縁の住吉村に



図 4B-1 神戸東部住吉川沿いの大邸宅地区

- 注1) 大きな文字は大字、小さい文字は小字。
 注2) 住吉川右岸の住吉村には大字制はなかった。観音林に住友本邸、武藤邸、野村元五郎邸、阿部元太郎邸。反高林に田辺貞吉邸、阿部房次郎邸。その西隣の小坂山に和田邸、牛神東に住友義輝邸、小林に野村徳七邸。その南の牛神に弘世邸、牛神前に小寺源吾邸、雨神に田代邸と甲南学園の平生邸。そこより山手にあるのが井手口の乾邸、手崎の小寺敬一郎と武田邸、川向の広海邸。新堂に建築家渡辺節邸。小田原に宗兵蔵邸。そのさらに西、御影村御影小字上ノ山に大林組と建築家置塩章邸。小字城之前に十合社長の水木邸、郡家小字兼安に岩井邸。小字石野に大阪朝日の村山邸。鈴木馬佐也邸は郡家と記されているが小字は不明。住吉川左岸の本山村野寄小字手崎には久原邸があった。

資料) 上の地図は、1953年東灘地図（4000分の1）（神戸市立中央図書館蔵）。左下の地図は、甲南高等學校々友會編『阪神地方水書記念帳』1938年。

おける大阪・神戸へのアクセス性の高さが邸宅街形成の契機となったことは容易に想像できる。

アクセシビリティ以外にこの土地が選好された理由としては、1908（明治41）年に阪神電鉄が出した『市外居住のすすめ』のなかで、病院院長長谷川清治が「……此部分〔神戸最寄の海岸部の「人家接続して市街の体裁」をなす部分〕を除き其山の手及び住吉魚崎辺より西宮迄は山の手、海浜共に宜しい。空気は固より清新で、土質も海浜は砂白く水清く山の手は砂又は赤土で飲料水も多く善良である」、また「夙川、芦屋川、深江、住吉川兩岸、並に其付近」は、川水も井水もともに最良であると書いたように、この近辺が「健康」に良好な環境であるという言説も大きく作用したに違いない。なお、阪神電車の開通は1905（明治38）年であり、この書は阪神間への居住を強くすすめるPR本であった。

同じ1905年には、のちに雲雀丘の住宅地開発を行なう日本住宅株式会社社長阿部元太郎が住吉村の住吉川右岸観音林で住宅地の開発を進めるが、これを機に同年関西の名だたる会社の社長・重役が邸宅敷地を取得していくことになる。同じ住吉川右岸の下流部に位置する反高林に、住友銀行初代支配人田辺貞吉（のちの住吉本邸、現在は住友不動産の中高層マンション）、郡家に住友家総理事鈴木馬左也、郡家兼安に岩井商店店主岩井勝次郎……といったように、このリストはさらにつづく。1908（明治41）年牛神に日本生命社長弘世助三郎邸、1912（明治45）年雨ノ神に大日本紡績創業者田代重右衛門邸、1912（大正元）年牛神前に東洋紡績社長小寺源吾邸、年代は特定できないが、おそらくそれより先に反高林に同じく東洋紡績社長阿部房次郎邸、1921（大正10）年小林に野村財閥の野村徳七邸、また大正中期には観音林に鐘ヶ淵紡績社長武藤山治邸、1925（大正14）年には先の田辺の敷地に住友本邸が建設される。1912（大正元）年には、阿部らによって観音林倶楽部が設立され、邸宅街のなかに親睦施設（現・住吉学園の敷地）ができる。

ちなみに阪急電車神戸線の開通は1920（大正9）年であるが、住吉川をわたり御影駅直前で当時阪神間最速を誇ったこの線にしては大きなカーブとなるのは、そこに村山邸があり彼が敷地の割譲を嫌ったためであるというエピソードは有名である。阪急電鉄の大立者小林一三の自叙伝にこのカーブに関するエピソード（鈴木総理とS曲線）が記されているので以下に引用しておく。この時期この場所（住吉村）に豪邸を次々と建設していった人たちがどのような連中であつたかを垣間見ることができるだろう。

神戸ゆき急行電鉄の計画は住吉川西堤から一直線に観音林を貫通し、村山邸北庭を横断して現在の御影停車場に至る区間に対し、村山龍平氏から大反対を受けて、此区間を地下道式に変更してほしいといふ申出があつた。……或日、大阪倶楽部の一室に村山、鈴木、武藤の三大人と、阪急からは平賀社長と私と五人、夕飯彼後三時間余り会談したのである。（小林一三『逸翁自叙伝 青春そして阪急を語る』阪急電鉄、1979年）

それまで神戸線はできるまいと高を括っていたが、どうにか資金を調達して実現化が迫ってきた阪急神戸線の御影延伸に慌てた「村山翁は隣邸の鈴木馬佐也翁と観音林の武藤山治の両氏を勧誘し、附近一帯の居住者を糾合し、地下鉄に変更の具体的調査と其建設資金増加額を負担する運動を開始し、彼は百万円近い寄付金を調達して、私に会談を申し込んできたのである。『静閑なる住吉の別天地に、電鉄をひらくことすら我々は大反対である。住吉駅から山の手一帯は、阪神間唯一の明媚閑雅なる住宅地として保護すべき仙境である。其中央を横貫して雑駁の俗天地たらしむるより、地下鉄に変更するとせば、どれだけか其住民は喜ぶことであらう。然も地下鉄に変更するために要する建築費の増加の中へ、我々は、百万円を寄付せんとするのであるから是非快諾せよ』と言ふのである」（小林一三、前掲書）。

小林は、この地下鉄案を費用面と工事の困難さから拒否したわけだが、よほどこの申し入れの圧力が強かったのか、次のようなせりふを残している。すなわち、「さりとして阪神間に於ける巨頭三大人がこれほど辞を厚うしての申し入れに対し、余りに冷淡に看過しては申訳がないと思って現在御覧の如く村山邸の北隣を通過するために、観音林からSカーブの悪線に余儀なく変更したことは、今になって考へるとまことに何といふ意気地がなかったであろうと、愚痴ざるを得ないのである」と。先にも述べたが、このうち村山は朝日新聞、武藤は鐘紡の社長、鈴木は住友家の総理事であった。

昭和に入ると、手崎に先の小寺源吾の養父で関西学院教授の小寺敬一郎邸（1930（昭和5）年）、上ノ山に大林組の大林義雄邸（1932（昭和7）年）、観音林に野村銀行の野村元五郎邸（1932年）、川向に弘海商店主弘海二三郎邸（1939（昭和14）年）、牛神東に住友義輝邸（1932年）、手崎に武田薬品工業の武田長兵衛邸（1932年）、小坂山に大阪の大地主和田久左衛門邸（1932年）、井手口に乾汽船社長の乾豊彦邸（1936（昭和11）年）が次々と建てられていく。1932（昭和7）年の建設ラッシュ

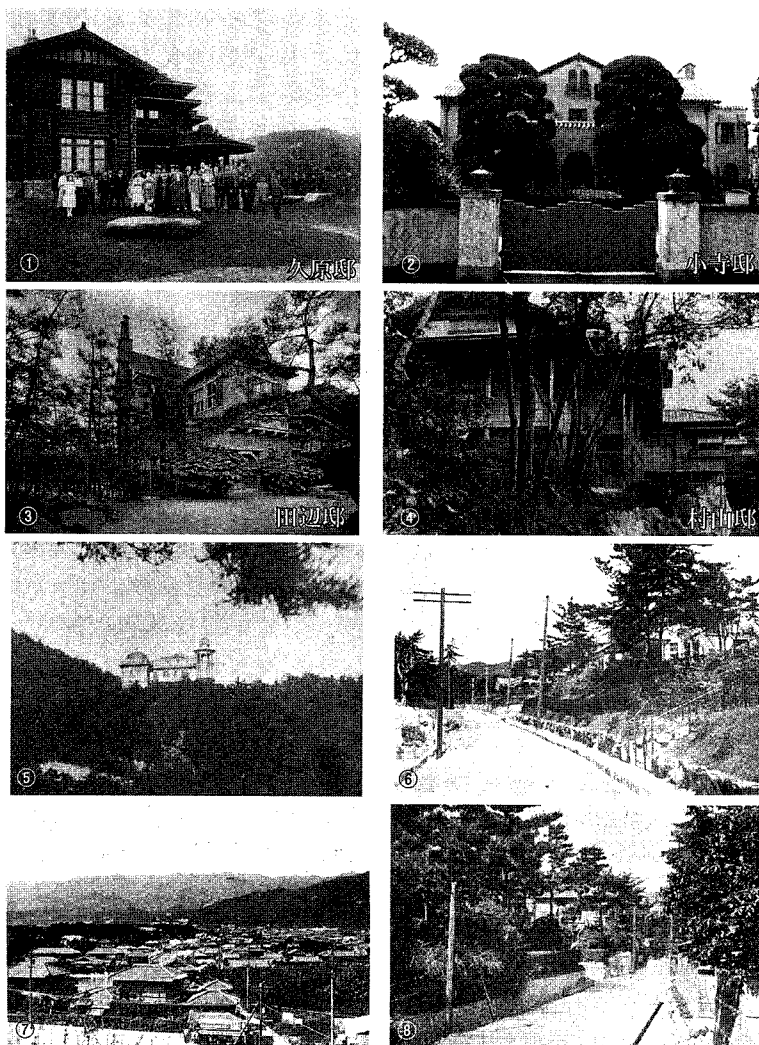


図 4B-2 阪神間の邸宅

注) ①=久原邸(野寄)、②=小寺邸(牛神前)、③=田辺邸(反高林)、④=村山邸(郡家)、⑤=二楽荘(岡本)、⑥=松風山荘(芦屋)、⑦=阪神魚崎駅付近から西北をのぞむ、左手の森が住吉川の堤、⑧=夙川香戸園住宅地

資料) ①③④は「阪神間モダニズム展」実行委員会『阪神間モダニズム——六甲山麓に花開いた文化、明治末期-昭和15年の軌跡』淡交社、1997年。②は大城直樹撮影。⑤⑥⑦⑧は『日本地理風俗大系 近畿地方』誠文堂新光社、1931年。

は特筆できよう。このほか、安宅産業、伊藤忠、丸紅、兼松、江商などの有力商社の社長宅も建てられていった。こうした邸宅の特長は、私鉄経営の住宅地や耕地整理事業による住宅地開発に比して、広い宅地面積を有していることにある。このほか大邸宅ではないが、渡辺節、宗兵衛、置塩章といった著名な建築家による瀟洒な邸宅も大正10年代から昭和のはじめにかけて、この御影・住吉の地に建設されていった(事実的記載については、「阪神間モダニズム」展実行委員会編『阪神間モダニズム——六甲山麓に花開いた文化 明治末期-昭和15年の軌跡』淡交社、1997年、243頁に負っている)。

冒頭で甲南病院と白鶴美術館の建設について触れたが、文教施設については野口孫一、阿部元太郎、田辺貞吉らによる1911(明治44)年の甲南幼稚園開設をはじめとして、1922(大正11)年には旧制(7年制)甲南高等学校が設立されている。1927(昭和2)年には灘中学校(現灘中・高)が白鶴酒造の嘉納治兵衛らによって開設された。

さて、これらの邸宅群も、阪神・淡路大震災後長い間更地だった住友本邸が、現在系列の不動産部門によって経営される高層集合住宅と化したように、野村邸も野村不動産の低層集合住宅となった。観音林倶楽部の建物は住吉学園に委譲され現在にいたっている。このあたりでほとんど変わっていないのは、村山邸や武田邸、小寺邸、乾邸などわずかに過ぎない。強烈なパーソナリティで豪腕を振るった大正時代の企業家の時代から100年近く経った。法人所有の邸宅となっても、維持しがたいためか景観の小分け化、高層化が進んでいる。かつての面影はほとんどなくなりつつあるのが現状なのである。

芦屋・六麓荘

邸宅街としてどうしても触れておかねばならないのが、芦屋の六麓荘^{ろくろくそう}である。その名のとおり、芦屋の六甲山麓、標高200mの南斜面に日本最大の販売区画面積を持つ邸宅街が1928(昭和3)年より開発される。図4B-3のように、空中写真でも一軒一軒が完全に識別され、自然林を豊かに残し、曲線を多用したサイトプランニングが実に印象的である。

六麓荘は、大阪の森本喜太郎が地元の出資を得て設立した株式会社六麓荘と、大阪の財界人、内藤為三郎が中心となり、国有林の払い下げを受けて、開発、分譲したものである。29.9ha、当初区画数196区画、300坪台平均の敷地に、香港の九龍半島やその対岸の香港島の白人専用街区をモデルに開発が行われたと言わ